

新・農業経営者ルポ／第178回

牛島謹爾シリーズ③
進取の気性で開園した
自然植物公園に
島の人口の200倍を呼び込む

牛島謹爾シリーズ③　進取の気性で開園した自然植物公園に島の人口の200倍を呼び込む

戦前のアメリカはカリフォルニア州で大成功を収めた日本人農業経営者というと、ワイナリーの長澤鼎やコメの国府田敬三郎が思い浮かぶだろう。ここにもう一人知ってほしい人物がいる。その二人と同時代を生き、「ポテト・キング」や「馬鈴薯王」と称された牛島謹爾（きんじ）だ。2024年度から1万円札の新紙幣の顔になることが決まった渋沢栄一が日本工業倶楽部で追悼会を主催したほどの人物でもある。手間のかかるポテトの生産を3万エーカー（1万2240ha）で行ない、全米の市場を左右したといわれた。彼の農場では監督者のような立場で働く同郷出身者がいたが、そのうち井上藤蔵という男の子孫だけがいまも福岡県各地で農業に携わっている。3回シリーズで取り上げる第三弾は福岡市西区能古島の「のこのしまアイランドパーク」に焦点を当てたい。なお、第一弾は2019年3月号に、第二弾は同5月号にそれぞれ掲載した。

文・写真／永井佳史、写真提供／久留米市教育委員会、のこのしまアイランドパーク、参考文献／『島を拓く』（酒井俊寿著、西日本新聞社発行）

福岡市内有数のサツマイモ農家が視察をきっかけに農業から転身

今回の舞台は福岡市内の島になる。博多湾の中央に浮かぶ能古島は、南北3・5㎞、東西2㎞、周囲12㎞、面積3・95平方㎞の小さな島で、ひょうたんのような形をしている。福岡県本土とは2㎞しか離れておらず、フェリーで10分だが、近いようで遠いこの隔たりなどを理由に、当時19歳の久保田耕作は1953年に農業から観光業への切り替えを決意するのだった。

本稿の第一弾と第二弾で登場した久保田寿、稔、仁（めぐみ）の3兄弟と耕作とはいとこの間柄になる。戦前、耕作の祖父・久保田春次は残島（注：1941年に福岡市に編入され、能古島となる）北端部の土地に目をつける。彼はそれまでも事業家的に農地を購入しており、息子の清（耕作の父）や甥の民蔵（寿たちの父）らを家に住まわせて農業に従事させていた。耕作の聞き書きである『島を拓く』によると、その面積たるや戦後の農地解放の際、17haぐらいを失い、残ったのが6haだったというから相当な百姓だったと想像できる。

太平洋戦争が勃発する直前の1941年10月、耕作を含む清の家族は能古島に移住する。同年1月、春次が急逝したことで当初の予定が狂っての対応だった。当地は業者が開墾してから10年余り放置されており、電気も水道も通っていなかった。引越前もさすがにそれはなく、ランプと別れを告げる1952年まではみじめな暮らしだったという。

清は1943年に出征して1945年に復員する。その前後の清の働きぶりは猛烈の一言で表現できるようなもので、明るいうちは家におらず、昼食以外は鍬を手放さない。市内有数のサツマイモ農家に上り詰め、市場で「久保田芋」と呼ばれるなど、ブランド化されて高値で飛ぶように売れたという。

耕作は中学卒業後、清の右腕となって農作業に励む。日本一の農家を目指していた彼は、ブラジルでの営農を模索するほど農業にのめり込んでいた。

そんな折の1953年、19歳の耕作は、取引市場の計らいで先進地視察の機会を得る。大阪と東京の市場では広い場内にコンクリートが敷かれ、梱包された野菜類が貨車1台分ずつt単位で仲買人に競られていた。対する耕作の1日の出荷量は500～800kg程度だった。狭い農地と輸送でハンディキャップを背負う島では、いくらがんばっても都会の低コスト・大量生産には勝てない。失意の下に帰郷した耕作が熟考した末にたどり着いたのは観光業



㈱能古島
のこのしまアイランドパーク
代表取締役社長
久保田 晋平　福岡県福岡市

1962年、福岡県福岡市生まれ。アメリカ・カリフォルニア州の語学学校を卒業。帰国後、マンション販売会社を経て、㈱オリエンタルランドに就職。3年間勤務し、86年に家業ののこのしまアイランドパークへ移る。91年、㈱能古島設立。99年より現職。2018年の来園者数は約15万人、売上高は4億1,700万円。

だった。

これからは働き続けた人々が疲れた心を癒すために自然を求めるだろう。それならば福岡都心に近いこの能古島で島の景観を活かした自然植物公園を作ろう。

こうした筋書きに父である清は一切反対しなかったという。息子を立て、縁の下の力持ちのような具合で協力するのだった。

耕作は30歳で開園することを念頭に置き、まずは海が見える眺望や地形を活かした設計図を専門家に描いてもらった。それに沿ってサツマイモを生産していた畑にツツジやカイヅカイブキなどを少しずつ植栽していった。やがて親族3軒の夫婦も事業に参画し、1958年に井上睦子（井上藤蔵の孫、久保田3兄弟のいとこ）と結婚した耕作夫婦、清夫婦の都合5軒10人で共同経営を進めていくのだった。代表者には耕作が就いた。

開園に先立っては、1956年に灯台キャンプ村（現・能古島キャンプ村・海水浴場）をオープンさせ、その運営から乗り出している。また、客足の確保に船を建造しようと1966年には久保田観光㈱を設立したが、これは開園後に公営フェリーが就航しそうな気配をつかんだため、自分たちで用意することはなかった。



のこのしまアイランドパークの設計図を持ち、指揮を執る久保田耕作（当時35歳）。

経営権の譲渡話まで持ち上がるもコスモスが危機を救う

そして、3年後の1969年、ついにのこのしまアイランドパークを開園させるのだった。

耕作が35歳の1969年4月2日、待ちに待った開園を迎える。当日は多くの人であふれ返ったが、それも長くは続かなかった。園内には他の遊園地にあるようなジェットコースターや観覧車などの遊戯施設はほぼ存在しない。植物だけの有り様に何もないではないかと失望する声が少なくなかったという。まだ癒しなる概念が世間に浸透していなかったこともあるだろう。

経営権の譲渡話まで持ち上がったなか、1979年に転機が訪れる。開園から10年が経って徐々に来園者数が伸びてきたこともあり、藪だった斜面を切り拓いてコスモスを植えたのだ。タイミング良くコスモスブームと重なり、1日で1万人を超える日も出てきた。それからも「ちびっこカーニバル」（現・春休みスケッチ大会、1978年）の開始や一戸建て宿泊施設「防人の里」の開設（1979年）、ふくおか'82大博覧会で昔の博多の街並みを再現した「思ひ出通り」の移設（1983年）、ゲートボールとゴルフとをミックスさせたオリジナルスポーツ「のこのこボール」（1984年）の創設など、できるだけ自然の姿で限りなく人工的なものから遠い世界観を貫き通しながら植物以外の仕掛けも打ち出していった。そうした甲斐があってか、人口が1000人にも満たない島に年間最高20万人が来園する盛況ぶりになった。



耕作の能古島移住50周年を記念して建立した「農魂」の碑。土に打ち込んだ鍬をかたどっている。サツマイモの生産から観光業に転身したが、土地を基盤にしている点では変わらない。初心を忘れないためにこの碑を建てた。碑文は以下のとおり。
大地に汗した開墾の日々
一粒の種が今
緑となり花と開く
明日の為に
力強く鍬を握ろう

ディズニーランド出身の二代目が会社の基盤を整え、新企画も生みだす

耕作の長男である晋平は1962年生まれで、中学まで能古島の学校に籍を置き、高校はフェリーに乗って福岡市内へ通った。その後、進学の段になった際、耕作から東京の大学か、アメリカに2年間語学留学するか二者択一を迫られる。考えた挙句、晋平は後者を選んだ。耕作から後継者に指名されていたわけではな

牛島謹爾シリーズ③　進取の気性で開園した自然植物公園に島の人口の200倍を呼び込む

かったが、兄弟は下に妹が2人という手前、将来は自分が後を継がなければならないと認識しての旅立ちだった。

英語をマスターして帰国した晋平は、マンションの販売会社に半年ほど勤務した後、オープンを目前に控えた東京ディズニーランド（㈱オリエンタルランド）に正社員で就職する。1983年4月からはトゥモローランドのスペース・マウンテン（ジェットコースター）を担当したほか、エレクトリカルパレード（夜のパレード）のプロジェクトチームにも配属された。

「周囲からは先を見越して修行しにいったんだろうと言われましたけど、そうではなかったんです。カリフォルニアに住んでいたときに現地のディズニーランドに何回か遊びに行って感心していました。あの楽しそうな仕事で給料までもらえるならやってみたいという発想でしたね」

当時一番人気だったスペース・マウンテンは通常でも1日の利用者が2万人と、運営には手を焼いたという。それでも、エレクトリカルパレードを含め究極ともいうべきサービス精神を培いながらゲスト（来園者）と接した経験は晋平に多大なる財産をもたらした。最終的には耕作に促される格好で、24歳（1986年）のときに能古島へ戻ることになる。

そこで晋平を待っていたのは会社としての体をなしていない現実だった。耕作ら親族は50代半ばで、すべて農家の出になる。だからこそ労働には耐えられたといえる一方で、たとえばオフィスフォンの転送方法がわからず、予約電話も相手にかけ直しを依頼するなど、一般企業ではあり得ない実態が次々と浮かび上がった。

こうしたディズニー以前の問題の解決が差し当たっての業務になった。

「次世代を担う人材がいなければ会社自体が回らなくなります。求人しようにも社会保険に未加入だったり、諸々不備がありましたので、就業規則や給与体系を整備し、高校に求人票を提出したり、大卒の採用に向けたリクルート活動を実施しました。その他にも、会社案内やパンフレットの作成、従業員へのビジネスマナーの徹底、朝礼の開催、広報活動の一元化など、企業として当たり前の体制づくりに努めました」



例年9月下旬～10月下旬に見ごろを迎えるコスモス。のこのしまアイランドパークの経営が好転するきっかけになった花でもある。なお、左側に見えるのが志賀島で、海の中道で博多につながっている。その志賀島と能古島との間は航路になっており、写真のように行き交う船を眺められる。



例年5月上旬～7月中旬に咲き誇るマリーゴールド。終花後の8月にコスモスの種子を播種する。



レストラン＆BBQの「防人」。海と花とが一望できる。手ぶらでバーベキューが楽しめるとあって人気が高い。自家栽培のサツマイモを使った「スイートポテト」や「イモ飯定食」（注：期間限定）を販売している。「能古のイモ天ぷら」は園内の入口での取り扱いになる。

後に耕作に次いで二代目社長となる晋平は、反対の声が上がっても改善すべきことは断行し、同時に新たな企画も実行していった。とくに1967年から海岸に移転していたキャンプ村・海水浴場は盛りだくさんだ。

アルゼンチン出身の知人と一緒に始めた「イスラ・デ・サルサ」というラテンミュージックとダンスとを組み合わせたイベントはかれこれ20数年続けている。ステージでは国内外のトップレベルのミュージシャンやダンサーたちと観客とが一体になり、リズムに合わせて自然と踊りだす。まるでカリブ海にいるかのように錯覚させる異空間が夏の終わりの2日間だけ出現する（注：昨年は1日間）。バーベキューがブームになりつつあったことを受けては、「手ぶらでBBQ」と銘打ち、園内から食材を運んで海岸で楽しむバーベキューを定着させた。それ以外にも、バナナの形状をしたゴムボートをジェットスキーで引っ張って海上を走る「バナナボート」や「海に浮かべるトランポリン」、ビーチバーまで手がけている。

リーガルウェディングは力を入れていくものの一つだ。これは海外での挙式を指し、ここでは香港など外国人によるものとなる。すでに実績はあるが、受け身の状態のため、小さなチャペルを設けるなどし、インターネットで積極的に宣伝していく意向だ。

ホームページについては日本語のほか、英語や中国語（簡体）、韓国語、タイ語と5カ国語に対応している。パンフレットはタイ語を除く4カ国語になる。ホームページでは今後、中国の繁体語に関しても制作していくことにしている。

創業理念からぶれない

2005年、耕作は70歳で他界した。さかのぼること6年前の1999年、晋平が37歳で二代目社長になった。生前の耕作は晋平にこんなことを言ったそうだ。

「金儲けが目的なら自分はもっと金持ちになれた自信がある。でも、自分の目的は能古島で事業を興し、成功させることだ」

園内の芝生で寝転ぶ父親や元気に遊ぶ子どもたち、楽しそうに過ごす来園者を見て、耕作は19歳のときに描いた夢は正しかったと思うのだった。

創業の理念に通じるエピソードを前掲書から引用したい。1979年に開設した防人の里だが、じつは1



能古島キャンプ村・海水浴場。ヤシの木は耕作が一人で担げるくらいの大きさのものを持ってきて植え、50数年経過してこのような状態になった。右側の「ジャンプ丸」は飛び込み船で、シーズン中は海に出している。バンガローでは宿泊できる。



思ひ出通り内にある「思ひ出や」。その他にも昔の博多の街並みを再現した店舗がそろう。絵付け体験の「梁焼」では、福岡県久留米市の久保田家の母屋を解体する際に取り出した梁や柱を再利用している。


今年２月25日に開かれたのこのしまアイランドパークの50周年記念祝賀会での集合写真。役員が５人、正社員が23人、非正規が20人程度になる。中国人や韓国人もいる。島外からフェリーを使った通勤者が８割以上に上る。

牛島謹爾シリーズ③　進取の気性で開園した自然植物公園に島の人口の200倍を呼び込む

年間を除き部屋にテレビを設置していない。当時、小学校のＰＴＡ会長を務めていた耕作は、保護者との懇談で夜はテレビ漬けだの、親子で寝室は別だの、会話がないだのという話を聞く。それに着想を得て宿泊施設を建設する際、部屋に仕切りを設けず、テレビも置かなかった。癒しや人工的なものから遠くという観点からそうすべきと判断してのことだった。この原点を晋平が踏襲している。

そんななか、近年取り組んできたのがバリアフリー化やトイレの改修だ。高齢者や身障者向けに園内の各所にスロープを付けたり、電動カートを増車してきた。トイレも身障者用にとどまらず、オストメイト対応を一昨年に完了させた。防人の里もリニューアルする計画がある。こうした心遣いで来園者を迎え入れようとしている。

今年は開園50周年の節目に当たる。屋外のレジャー施設で一番問題になるのは天候で、週末にどれだけ晴れたかで来園者数や売り上げが大きく動く。いかにきれいな花を咲かせていてもこればかりはどうしようもない。ただ、でき得る限りの企業努力で万全の準備を行ない、一度来園してもらったらリピーターにつなげていけるようにしておく。懐かしさはそのままに、少しずつ変化していくその向こうにあるものは、定期的に花の撮影に訪れる年配客や、宿泊を兼ねて遠路はるばる来園する東京からの家族連れの姿だったりする。島そのものといっても過言ではないのこのしまアイランドパークは、こうして50年後の１００周年でも都会のオアシスであり続けるだろう。

異彩を放つ井上藤蔵の子孫たち

先祖が偉人だったとしても、直接触れ合ったことがなく、間接的に耳にするとしても世代を重ねれば、当事者意識はどうしても薄れてしまうに違いない。今回の３件の取材でもそれは少なからず認められた。だが、久留米市の㈲久保田園芸（注：第一弾）、糸島市の㈲久保田農園（注：第二弾）、そしてのこのしまアイランドパークの創業家一族は、井上家と久保田家とで婚姻関係が多数あることも関連してか、牛島謹爾や井上藤蔵の影を感じられたのも事実だ。晋平は両家の特徴をこのように説明してくれた。

「井上の家系は不正をせず、毎日コツコツと働く働き者で、久保田の家系はアイデアが豊富なようです」

いずれにしてもまばゆいほどの異彩を放っているのは確かだった。

（敬称略）



晩年の牛島謹爾（1864-1926）
久留米市教育委員会所蔵



植民遠征隊元勲仲茂助帰朝送別会於て牛島総督私邸（明治36年）久留米市教育委員会所蔵
前列左から２番目が牛島謹爾、後列左から２番目が井上藤蔵になる。